

パスカルの《アポロジ》の プラン復元に関して (VII)

竹 下 春 日

Sur le plan de l'《Apologie》
de Pascal (VII)

われわれが本稿において企図するところは、Classé（既分類断章群）がわれわれの所謂プラン（パスカルの《アポロジ》の）中に予定されていたことを、改めて証明することである。この証明こそは、われわれの知りえた Non classé のタイトル（章名）の順序決定のための準備であり、前提である。なぜなら、Non classé のタイトルの順序決定はプラン復元に不可欠であり、そうしてこの決定のためには、Classé の諸断章を利用せねばならないからである。

I Lafuma の証明の補強

すでに拙論（II回）において、Classé 作製当時のプランと Non classé の書かれた時期のプランとが同じものであることを、Lafuma が La. 29 (Classé) と La. 48~49 (Non classé)——両断章はともに《アポロジ》の《第一部》Première partie と《第二部》Seconde partie にかんするものである——との直接的比較により、両者の一致によって証明した。この証明は論証によって行われているのではなく、読者の直観的判定に委ねられているのである。『パンセ』の研究者ないしこれを精読した人々にとっては、Lafuma の主張せんとするところは肯げるところであるが、一般の人々にとっては《第二部》は明瞭であるが、《第一部》にかんしては多少とも不明瞭の感を免れえないであろう。したがってわれわれは、《第一部》にかんし以下論証を通じて、Lafuma の意

図するごとく、《アポロジ》のプランに本質的変化のなかった事実を、明らかにしたい。まず両断章を掲げれば、次のごとくである——《第一部。神なき人間の惨めさ。第二部。神とともにある人間の至福。換言すれば、第一部。自然が腐敗していること。自然そのものによって。第二部。修理者が存在すること。聖書によって。》⁽¹⁾ (La. 29-Br. 60);《第一部の序言。自己認識の問題を論じた人たちについて話すこと。……彼〔モンテーニュ〕が自己を描こうとした愚かな企て。しかもそれは、ふとして自分の主義に反してやったことではない。そういうあやまちなら、だれにでも起こることである。ところが、彼は自分自身の主義として、しかも初めからの主なもくろみとしてそれを行なっているのである。なぜなら偶然と弱さとのために、ばかなことを言うのは、よくある失敗であるが、それをもくろみとして言うのは、がまんできないことだからである。しかもこんなことを言うにいたっては……》(La. 48-Br.60)。

以上の二断章を比較した時、われわれは《第一部》と《第一部の序言》との一致ないし相関にかんしては、叙上のごとく直観的には了解しがたい。すなわち、《神なき人間の惨めさ》*Misère de l'homme sans Dieu* と、《モンテーニュ》が《愚かな企て》*le sot projet* を抱いていることや彼が《もくろみとして》*par dessin*《ばかなことを言う》*dire des sottises* ことが、なぜ一致を示していると言えるのかが、問題である。この問題の解決の手掛りとなるのは、La. 48 と内容的に連関のある La.936-Br. 63 である——《モンテーニュ。モンテーニュの欠陥は大きい。みだらな言葉。グルネ嬢がなんと言おうと、これは全く価値がない。軽卒、『目のない人間』。無知、『円と等面積の正方形を求めること』『もっと大きな世界』。自殺や死についての彼の気持。彼は救いについての無関心をふきこむ、『恐れもなく悔いもなく』。彼の著書は人を敬虔にさせるために書かれたものではないから、この義務はなかった。しかし、人をそれからそらさないという義務は、どんな場合にもあるのである。人生のある場合における彼の、少し手放しで、享乐的な気持は許すことができる。七三〇、三三一。しかし、彼の死に対する全く異教的な気持は許すことができない。なぜなら、すくなくとも死ぬことだけはキリスト教的にしようと願わないのだったら、敬虔の心をすっかり断念しなければならないからである。ところが彼は

その著書全体を通じて、だらしなくふんわりと死ぬことばかり考えている。》

この断章におけるパスカルのモンテーニュ批判の要旨は、彼者が《だらしなくふんわりと死ぬことばかり考えている》こと、モンテーニュの《死に対する全く異教的な気持》、要するに彼の《救いについての無関心》なる点に存する。そうしてこの《救いについての無関心》non-chalance du salut の状態にある人間とは、常識上神なき人間と言って差支えあるまい。ところで、パスカルは《神なき人間の不幸》le malheur d'un homme sans Dieu (La. 11-Br. 194) について語っている、而して《不幸》malheur とは《惨めさ》misère の別称にほかならない。それゆえモンテーニュの鼓吹する《救いについての無関心》とは、パスカルの眼から見る時《神なき人間の不幸》すなわち《神なき人間の惨めさ》を意味するものにほかならない。かくてわれわれはLa.29(Classé)とLa. 48 (Non classé)とが、その主旨において一致することを、確認するのである。このことは言うまでもなく、ClasséとNon classéが、その大要において一致することを示すものであり、したがって《アポロジ》のプラン復元に当って、Classéの断章群を利用しうることを、われわれに保証するものである。われわれは次に、この同じ問題に対する第二の証明——われわれ自身の証明を開陳することにしたい。

II 第二の証明

われわれの第二の証明の基礎となるものは、(一) Classé が作製された以後パスカルの死に到るまで(1658年末~1662年8月迄)、パスカル自身によってClasséがliassesという形ちで保存されたという事実そのものと、(二) Classé中には rayer された断章が多々あるという事実である。また Non classé 中ならんらか rayer されている断章は少くとも115個に達し、このうち断章全体が抹消されているものは、7個存する。かようにパスカルが Non Classé を執筆した時期においても、彼は断章中の不適當な部分もしくは不用な部分は抹消し訂正加筆を施したのであり、われわれはこの時期において、パスカルが訂正の意欲を明らかに保持していたことを、知るのである(拙論V回のII参照)。したがって、もし彼が Classé 全体を不用と判断したのであれば、これに対しなん

らかの処置を施したであろうことは明らかである。例えば、病中と雖も下僕にリヤス全部の廃棄を命ずれば事は済むのである。それゆえ、Classé 全体の抹消ないし廃棄を示すなんらの具体的事実が発見されぬ以上、われわれは原則として、Classé はパスカル自身によってプランの一部として是認されていたと判定せざるをえないのである。以下われわれは、この結論を支持強化する例証の若干を個別的に挙示することにしたい。

III 個別的証明⁽²⁾

(a) 2°《空しさ》について——Non classé に所属する La. 100-Br. 275は、次の叙述を含むものである、《人々はしばしば自分たちの空想を心情ととり違える。そして回心しようとするやいなや、回心したと信じてしまう。》この短い断章の主要概念は《空想》imagination である。ところで Classé (2°) 中には、《想像力》Imagination (La. 81-Br. 82) なるタイトルをもった一断章が存する。この断節は量質ともに充実しており、内容上 La. 100 に比して遥かに詳しくかつ長文である。したがって Non classé の La. 100 は、Classé の La. 81 を欠いては在りえないことになる。それゆえ Non classé (La. 100) が書かれたとき、Classé (La. 81) は、これを補うものとしてパスカル自身によって生かされていたと、言いうるのである。

(b) 6°《偉大さ》について——この章にぞくする重要断章は La. 217-Br. 348, La. 218-Br. 397, La. 220-Br. 398, La. 221-Br. 409 の四つである。この四個の断章はいずれも人間の偉大さの理由を明瞭に叙したものである。このうち二個を示すと、次のごとくである——《考える葦。私が私の尊厳を求めなければならないのは、空間からではなく、私の考えの規整からである。私は土地を所有したところで、尊厳を増すことにならないだろう。空間によっては、宇宙は私をつつみ、一つの点のようにのみこむ。考えることによって、私が宇宙をつつむ。》(La. 217), 《人間の偉大さは、人間が自分の惨めなことを知っている点で偉大である。樹木は自分の惨めなことを知らない。だから、自分の惨めなことを知るのは惨めであることであるが、人間が惨めであることを知るのは、偉大であることなのである。》(La. 218) ところで Non classé 中には、

重要さにおいてこれらに比適するものは見当らない。したがって、この章を指成すべき Non classé の諸断章は、Classé の諸断章したがってこれらを含むリヤス全体、すなわち 6°《偉大さ》の章を不可欠としている。言い換えれば Non classé は Classé なしにはありえないのである。

(c) 8° 《気晴らし》について——La. 269-Br. 139, La. 270-Br. 142, La. 272-Br. 142 の諸断章は Classé (8°) に所属するものであるが、いずれも《気晴らし》divertissement の本質を説きかつ長文のものであって、Non classé にぞくすべき諸断章は、これらを欠いては内容上不完全である。したがって Non classé は Classé 全体(8°) に対して依存的関係にある。Non classé の La. 275-Br. 140 が全部 rayer (抹消) されているのは、上出の諸断章 (Classé) によってその内容が尽くされているからである。このことによっても、われわれは今述べた依存的関係を理解しうるのである。

(d) 10°《至福》について——Classé (10°) の La. 300-Br. 425 は、《第二部。信仰のない人間は、真の善をも正義をも知ることができないということ》*Seconde partie. Que l'homme sans la foi ne peut connaître le vrai bien, ni la justice.* なる見出しをもつが、この断章中の次の叙述は、パスカルの神学思想の根本を示すものである——《神だけが、人間の真の善である。そして人間が神から離れて以来、自然のなかで、人間にとって神の代わりになれなかったものは何もなかったというのは、奇妙なことである。天体、天、地、元素、植物、キャベツ、ねぎ、動物、昆虫、子牛、蛇、熱病、ペスト、戦争、飢饉、悪徳、姦姪、不倫などそれである。そして、真の善を失って以来、人間にとって、あらゆるものが、何でも真の善として見なされうるようになり、神と理性と自然とのすべてにあんなにも反する自分自身の破壊に至るまでそうなったのである。》この叙述内容は爾後パスカルの《アポロジー》の基調を成すものであり、Non classé 中の《至福》にかくする諸断章はすべて、この上に成り立つものである。したがって、Non classé は Classé (10°) に対し補助的役割をなすものにすぎない。

(e) 14°《この神の証明方法の卓越性》について——Non classé の断章であって確実にこの章にぞくすべきであると見做しうるものは、見出し難い。しか

しかかる断章の有無にかかわらず、Classé (14°) は章名から推して知れるように、《アポロジ》にとって不可欠である。それゆえ Non classé が書かれた時期に、この Classé がプラン中に編入が考慮されていたと見るべきである。

(f) 15° bis《本性の墮落》について——この章にかくしては、リヤス中に存するものはタイトルのみで、断章は存在しない。したがって Classé は皆無であるが、これにぞくすべき断章が Non classé 中に見出される——La. 130-Br. 441, La. 132-Br. 439, La. 145-Br. 448, La. 601-Br. 546, etc. (なお拙論Ⅲ回の自然的分類項目2を参照)。かかる事実は、Classé(章名)と Non classéとの相関を端的に示すものである。

(g) 16°《他宗教の虚偽》について——この章にぞくすべき Non classé の断章としては、確実なものは La. 418-Br. 492, La. 419-Br. 589, La. 420-Br. 259, La. 422-Br. 487, La. 425-Br. 590, La. 466-Br. 737, La. 558-Br. 591の7個のみであり、これらはすべて補足的性格のものにすぎない。これに反して Classé 中のものは核心的意義を担うもの(ex. La. 402-Br. 435)があり、量的にも多い(18個)。したがって Non classé が Classé (16°) に対して付属的地位にあることは、明らかである。すなわち、Classé (16°) が Non classé をふくむプランにおいて、必須のものであったことは、否定し難い事実である。

(h) 17°《愛すべき宗教》について——Classé (17°) の断章は La. 423-Br. 774 および La. 424-Br. 747 の2個のみであるが、この章の主旨はキリスト教こそ《愛すべき》aimable 唯一の宗教である所以、全人類を救いうる根拠は《贖い主》Rédempteur ——《すべての人のためのイエス・キリスト》(La. 423)にあることを、説く点にある。ところで Non classé に属すべきものとしては、La. 466-Br 737を除いて、具体的にイエス・キリストの救済と贖いについて触れたものは、存しない。La. 466については、これを La. 423(Classé)と比較すると、後者は聖書からの引用句が掲げられていて、より具体的説得的であり、パスカルがこの断章に中心的な役割を与えていたことが分る。したがってこの章にかんしても、Non classé は Classé (17°) に依存していると、言う。

(i) 19°《象徴としての律法》について——この章にかんしては、Classé にも

Non classé にも、多数の断章が存する (Classé=32個、Non classé=約 25 個)。このうち最も重要な意義をもつものは、Classé の La. 508-Br. 642 である。その理由は、この断章の内容そのものが示している——《旧約と新約とを一度に証明すること。それらの二つを一気に証明するには、一方の預言が他方において成就しているかどうかを見さえすればよい。預言を吟味するにはそれらを理解しなければならない。もし人がそれらに一つの意味しか認めなければ、メシアが来臨しないことは確かであるが、それらに二重の意味があるとすれば、メシアが来臨しないことは確かであるが、それらに二重の意味があるとすれば、メシアがイエス・キリストとして来臨することは確かである。だから、あらゆる問題は、預言に二重の意味があるかどうかにかかっている。聖書にイエス・キリストと使徒たちとが与えた二重の意味があることは、以下によって証明される。……》かようにこの断章の述べるところは、パスカルの《神の証明方法》の具体的内容にかんするものであり、この断章を欠けば、爾余の全断章（この章にかんする Classé 及び Non classé）の《アポロジ》における役割にかんして、われわれはその理解の手掛りを失ってしまうのである。それゆえ Non classé が執筆された当時のプランに、この断章したがってこれを含む《章》(19° の Classé 全体) が欠如するということは、絶対にありえないのである。

(j) 22°《モーセの証し》について——この章 (Classé) 中の La. 569-Br. 624 は神の《天地創造と大洪水》la création et le déluge の真実であることを証明するのが主旨であり、そうして Non classé の La. 551-Br. 621 はこの《天地創造と大洪水》を既成の事実として前提している。すなわちこの断章 (La. 551) は、次のごとく語っている——《天地創造と大洪水とは過ぎ去って、神はもはや世界を破壊することも、それを再び創造することも、彼自身のそのような大きなしるしを与えることも必要でなくなったので、特に形づくられた一民族を地上に設けはじめ、メシアがその霊をもって形づくられる一民族の興るときまで、彼らを存続させようとされた。》このように Non classé (La. 551) が Classé (La. 569) を前提とする以上、われわれは Non classé が La. 569 をふくむリヤス、すなわち 19° の章全体 (Classé) に対して付帯的であり、前者は

後者なしにはありえないのである。

(k) 23° 《イエス・キリストの証し》について——Classé 中には重要な断章が多く、多種の証拠を挙示している。これに反して Non classé のものは、Classé のものと内容的に同類的であるか（これは少い）、付带的もしくは補助的役割の断章のみである。したがってこの章の場合にも、Non classé は Classé を欠くことができないのである。

(l) 24° 《預言》について——この章を構成する Classé 中で最大の重要性を有つものは、La. 626-Br. 706 である。なぜなら、この断章は《預言》prophéties の存在理由を、イエス・キリストとの関係において最も明瞭に叙述しているからである。このことは、断章そのものを一読するだけで十分である——《イエス・キリストの（メシアである）最大の証拠は、預言である。神もまた預言のために最大の準備をされた。なぜなら、その成就として起こった出来事は、教会の発生から終局にいたるまで継続する一大奇跡だからである。そこで、神は千六百年間に預言者たちを起し、そしてその後の四百年間に、それらのあらゆる預言を、その伝達者であるすべてのユダヤ人とともに、世界のいたるところに散布された。これらのことが、イエス・キリストの降誕に対する準備であった。その福音は全世界の人々から信じられねばならなかったので、それを信じさせるために預言のあることが必要であっただけでなく、それを全世界の人々に受け入れさせるために、預言が全世界に行きわたることが必要であった。》ところで Non classé のうち、この章（24°）中に分類されるべき断章であって、これに比適する重要意義をもつものは皆無である。したがって、Non classé は Classé（24°）を必要とし、これを欠くことはできない。

以上われわれは、或る一個の《章》に所属する Classé 中の断章が、一般的に言って、Non classé の断章⁽³⁾にとって必要不可欠なることを、明らかにした。このことによって、Non classé が執筆された時期のプラン中に、該章を構成する Classé 全体が含まれる所以を明らかにしたのである。Classé 中の一断章が Non classé の一断章に対して核心的意義をもつことによって、後者に対して前者が不可欠であることが示されるならば、この Non classé の一断章に対して一個の Classé 全体、すなわち一個の《章》が必須のものとなりうる。なぜなら

ば、Classé 中の一断章は他の諸断章とともに綴られて一個の断章綴 (liasse) となっており、これがまさに一つの《章》chapitre を形成しているからである。

以上によってわれわれは、12個の章 (Classé) が Non classé と密接な連関をもつことを、明らかにしえたのであり、したがって Classé が Non classé の書かれた時期のプラン (パスカルの死直前のプラン) において、生かされていたという事実を、事例に就いて証明し得たのである。

III パスカルの叙述態度について

われわれは最後に、各《章》(リヤス)の順序を決定するための第二の基礎的準備に着手せねばならない。パスカルが彼の《アポロジ》にかんする一著作を世に問うに当って、彼が読者を予想しつつ、いかなる叙述の態度ないし叙述方法を探らんとしたか、あるいは探るべきと考えたかを、われわれは事前に検討しておく必要が存する。なぜなら、彼の読者に対する態度ならびに彼の叙述方法を、抽象的ながらこれを知っておくことは、われわれの章順序の推定に直接間接役立つからである。

(一) パスカルが『パンセ』その他の作品で、上述の事柄にかんして述べていることは、まず彼が《人の気に入る》agrée⁽⁴⁾ ことを、心掛けたことである。『パンセ』においては、彼はトマス・アクイナスやシャロンの scolastique な論述方法を批判し、《これはわれわれをうっとりくさせ、退屈させる。》と述べ、この点にかんしてモンテーニュを評価している——《モンテーニュの混乱について。彼は、直線的方法の欠陥をよくわきまえていたので、話題から話題へと飛んでは、それを避けていた。彼は垢抜けした様子を求めていたのだ。》(La. 48-Br. 62) かように、《話題から話題へと飛んで》en sautant de sujet en sujet とパスカルが書いていることから見て、われわれは彼の叙述形式が、表面上飛躍的で変化に富むことを予定していたことを、察知しうるのである。

(二) しかしこれと対蹠的に、パスカルが論証の面で論理学の規則を遵守し、敢えて論理の飛躍を目指すことはありえなかったことは、余りにも明瞭である。彼自身著名なる数学者、科学者であったのみならず、一論文中で《説得術の幾何学的証明の全方法》la méthode entière des preuves géométriques de

l'art de persuader にかんする《規則》 règles を要約しているからである⁽⁵⁾。したがって彼の《アポロジ》も、論理的には順序正しくかつ整合的であるべく予定されていたと、想像しうるのである。

(三) 次に指摘しうることは、パスカルの読者心理の誘導が自然的漸進的であるということである。この実例を示すものは、La. 35-Br. 187 である。同断章は次のごとく叙している——《順序。／人々は宗教を軽蔑している。それを憎み、それが真実であることを恐れている。これをなおすためには、まず宗教が理性に反するものではないことを示さなければならない。尊ぶべきものとしてそれに対する尊敬の念を起こさせなければならない。／次に、それを愛すべきものとなし、善い人たちにそれが真実であることを願わせ、そのあとで、それが真実であることを示すのである。／敬うべきというのは、それが人間をよく知っているからである。／愛すべきというのは、それが真の幸福を約束するからである。》この断章は、一読して明らかなごとく、宗教に反感を有する無信仰者を説得することを目的とするものである。この無信仰者とは實際上無信仰の読者であり、パスカルはかかる読者の心理をキリスト教信仰へと誘導せんとしているのである。この誘導は、次の三段階を有する——(1) 《まず宗教が理性に反するものでない》こと、つまり《それが尊ぶべきものとして、それに対する尊敬の念を起こさせ》る段階。(2) 《次に、それを愛すべきものとなし、善い人たちにそれが真実であることを願わせ》る段階。(3) 最後に、《そのあとで、それが真実であることを示す》段階。

扨てこの三段階を通覧するとき、われわれが言いうることは、パスカルの心理誘導が極めて自然であるということである。なぜなら、宗教が理性に反するものでないことを読者が理解すれば、宗教が道理に適った尊重すべきものであるという気持を、彼が抱くのは自然であるからである。特にパスカルの所謂宗教が《人間をよく知っている》ことは、読者に《尊敬の念》を起こさせることは、容易にこれを想像しえよう。次に、かかる宗教が《真の幸福》を約束すれば、読者はこの宗教を愛すべきものと考え、これが本当であれば良いという気持になるであろう。そうして、この宗教が真実であることが証示されれば、読者が遂に納得し、キリスト教に入門する心境に到ることは、われわれの理解に

とって、決して難くはない。以上パスカルの読者心理の誘導方法は自然であり、無理がないと言いうる。少なくともパスカル自身心理誘導において、無理なく自然であろうとしたことは、明らかである。

(四) 次にわれわれが注目すべきパスカルの叙述方法の定型に、《漸層法》gradation が存する。漸層法とは、当時一般化していたレトリック上の一形式であるが⁽⁶⁾、この叙述形式についてパスカルが留意していた事実は、われわれにとって重要である。断章 La. 180-Br. 337 において、パスカルは次の如く書き残している——《現象の理由。漸層法。民衆というものは、生れつき身分の高い人たちを敬う。生半可な識者連は、生れつきなんぞはその人自身の良さではなく、偶然そうなったのだと言って、生れつき身分の高い人たちを軽蔑する。本当の識者たちは、民衆と同じ考えではないが、背後の思想によって、この人々を敬っている。知識より熱心さに勝っている信仰家たちは、この人々が識者たちに敬われている理由というのを知ってはいるが、この人たちを軽蔑する。というのも、信仰が与えた新しい光で判断するからだ。だが完全なるキリスト者は、別のもっと高い光に照らして、この人たちを尊敬する。かように人が光を持つにつれて、その意見なるものは、正から反へと相次いでいくのだ。》⁽⁷⁾

この断章中には、五つの意見が提示されている——(イ) 民衆の意見。(ロ) 生半可の識者の意見。(ハ) 本当の識者の意見。(ニ) 熱心な信仰者の意見。(ホ) 完全なキリスト者の意見。この五個の意見のうち、パスカルの立場から見ると一番低級な意見は最初の民衆の意見であり、最も高級なそれは最後の完全なキリスト者の意見であることは、明らかである。したがってわれわれは、パスカルの叙述方法について、次の如くその特性を規定しよう——(i) 叙述内容の順序は、漸層法的であること、即ち段階的であること。(ii) 一番重要度の劣るものが最初に置かれ、最重要のものが最後に置かれること。ところでこの段階的順序そのものと、非重要(相対的に)→重要という配置構造とは、(一) において述べられた読者に《気に入る》こと及び(三) において触れられた読者心理の誘導の自然さと密接な関係を有することが、分る。なぜなら、この段階性を無視して、(イ) から(ホ) へ飛躍したり、あるいは(ホ) から(イ)

へ逆コースを辿るならば、読者に対して強い印象を与え得ず、説得力は弱まり、読者の関心は減少せざるをえないからである。したがって上述の (i) および (ii) は、必然的であると言いうるのである。

(五) 以上 (一) ~ (四) を総合すると、パスカルの叙述の一般的性格について、次の如く言いうる。(a)——叙述形式の表面的外見的展開は強変化的飛躍的であるが、(b)——内容の展開は論理上整合的無飛躍的であり、(c)——心理の誘導面にかくしては、自然的、漸進的ないしは段階的である。パスカルの叙述にかんするこの三つの特徴は、今後《章》順序を推定せんとするわれわれにとって、抽象的とは言え、基本的重要性を持つものである。それゆえ、われわれはこの事に至大の注目を払わねばならないのである。

(六) 上に述べられたパスカルの叙述方法の特性にかんするわれわれの規定が、果して妥当であるか否かを、——特に (四) の (ii) について——われわれは次に実際に検討してみたい。(a)——まず《アポロジー》の叙述にかんして一番重要な事項はなんであるか。それは、《アポロジー》がパスカルにとって一種の論法である以上、最も重要なものは証拠——《宗教の証拠》である。重要度の一番高いものが終りに配置され、最も重要度の低いものが始めに置かれるという構成——こうしたわれわれのパスカルの叙述方法の性格づけが正しいならば、《宗教の証拠》は、《アポロジー》の《第一部》ではなく、《第二部》に置かれたはずであり、事実そうになっている。(b)——次に、《第二部》中の前半ではなく、後半に置かれたはずであるが、これを『第一写本』のタイトル表に拠れば、事実として確かめられる。すなわち、Lafuma の番号付けを用いれば、《第二部》(11° または 12° より 27° まで)のうち、18°~26° を占めているのである。(c)——第三に、《宗教の証拠》そのものを検討することにしよう。このためわれわれは、パスカルの所謂《宗教の証拠》について述べている二断章と、『第一写本』中のタイトル表の一部とを、表として再び掲げることにはしたい(拙論V回到既出)。

<表>

(1) La. 38-Br. 290 (Non classé)

宗教の証拠。

道德。教理。奇跡。預言。表徴。証拠。

(2) La. 459-Br. 289 (Non classé)

証拠。

- 1° かくも自然に反するのに、自力でかくも強固に、静かに確立したキリスト教によって。
 - 2° キリスト者の魂の聖潔、高尚、謙虚。
 - 3° 聖書の不思議。
 - 4° 特にイエス・キリスト。
 - 5° 特に使徒たち。
 - 6° 特にモーセと預言者たち。
 - 7° ユダヤ民族。
 - 8° もろもろの預言。
 - 9° 永続性。他のどの宗教にも永続性がない。
 - 10° すべてのことを説明する教義。
 - 11° この律法の聖きこと。
 - 12° 世界の動きによって。
-

(3) 『第一写本』中の諸タイトル (Classé)

- 18° 宗教の土台と反対論への回答。
- 19° 表徴としての律法。
- 20° ラビの教え。
- 21° 永続性。
- 22° モーセの証拠。
- 23° イエス・キリストの証拠。
- 24° 預言。
- 25° 特別の表徴。
- 26° キリスト教の道德。

扱てパスカルの掲げる証拠のうち、一番重要度の劣るものは、表の(3)について言えば、26°《キリスト教の道德》である。なぜなら、これは読者の側から見て比較的容易にその内容が想像されうるからであり、したがって読者の関心を惹く程度が一番弱いとおもわれるからである。それゆえ、これは《証拠》中の最初または最初に近い位置に置かれたはずである。これが表の(3)において終りの方に置かれたのは、前回(VI)において証明された如く、タイトルの

順序が乱されたままコピーされた結果に外ならない。事実、表の（１）においてはトップに置かれている。

（d）——また表の（２）においても，《キリスト教の道徳》に相当する《キリスト者の聖潔，高尚，謙虚》は 2° に置かれており，われわれの結論を裏付けている。（e）——最後に，《宗教の証拠》中一番重要と見られるもの，謂わば切札としての《証拠》は，表の（２）および（３）においては，不明であるが，表の（１）においては明らかに最後に位置している。これは証拠中の証拠と言いうるものであり，パスカルも La. 38 に《宗教の証拠》なるタイトルを与えながら，証拠として列挙したものの末尾に置き，しかも特に《証拠》という名称を設けているのである。これは，これ以外の証拠に比して，末尾のものが特に《証拠》たる資格を持つことを，示すものである。われわれは，以下このものを，タイトルに示された広義の《宗教の証拠》に対し，狭義の証拠と呼び，両者を区別することにしたい。ところでこの狭義の証拠こそは，パスカルにとって，最も重要であったと推定しうることに，われわれは至大の注目を払わねばならないのである。

（f）——以上（a）～（e）の 5 個の事実により，パスカルの叙述方法に対するわれわれの性格規定は，未だ十分ではないにせよ，或る程度の確実性を有することが，実証されたのである。

（七）われわれは（六）の（f）の結論の上に立って，更に一步を進め，表の（２）の末尾に置かれた 12° 《世界の動きによって》が果してわれわれの所謂「狭義の証拠」であるか，またこうした証拠に相当する表の（３）における最重要事項，言い換えれば最後に置かれていたはずのものは何かを，推定することにしたい。このためにわれわれは，Etienne Périer の執筆した『パンセ』初版の序文を顧ることにしよう。同序文中には，《アポロジー》のプランの概略が描かれているが，パスカルが予定していた最後に置かるべき証拠にかんしては，次の如く解説されている——「こうして，旧約の諸書をひとわたりざっと見とおし，宗教の真理を基礎づけ，その証拠として役立ついくつかの説得的な考察を進めたのち，最後に，かれは新約聖書についても語り，福音の真理に宗教の証拠を求めようとした。／先ずはじめに，イエス・キリストについて語

った。かれはすでに、預言と律法のあらゆる象徴によって、イエス・キリストのことを異論の入るすきのないほどまでに説明しつくし、それらがキリストにおいて完全に成就されたことを説いたのであるが、さらに、キリストのご人格そのもの、その奇跡、その教え、その生涯の出来事からとり出した多くの証拠をならべて見せたのであった。／次には、弟子たちに目をとめた。弟子たちがあらゆる場所で声高くのべ伝えた信仰の真実性を示そうとして、弟子たちがいかさま師であったとするか、それともだまされていたとでも思わないかぎり、弟子たちがうそをついたと非難することはできないのだと納得させ、その後で、こんなふうに考えることはどちらも不可能だとはっきり知らしめたのである。」⁽⁸⁾

この Périer の解説により、次の事が分る。(a)——「最後に」置かれた証拠なるものは、内容的には、「先ずはじめに」預言と象徴としての律法とによるイエス・キリストの証拠であり、「次には」イエスの弟子たちの証言の真実性である。ところでかかる内容は、最後に述べられた証拠という点から見て、上に述べた狭義の証拠（表の（1）の中の《証拠》）と推測しうる。

(b)——表の（2）の 12° も、末尾に置かれているゆえ、矢張り狭義の証拠と見做しうる。(c)——ところで、表の（1）の最後に置かれた《証拠》、即ち狭義の証拠の具体的内容は何か。次にわれわれは、これを知るために、表の（3）と表の（1）とのそれぞれの分類内容の照応一致を検討することにしよう。その結果は、次の如くである（対応一致の関係を等符号で表記する）——
 道徳=26° キリスト教の道徳。教理=18° 宗教の土台・20° ラビの教え。預言=24° 預言。表徴=19° 表徴としての律法・25° 特別の表徴。（1）の奇跡は（3）の中には、そのままのタイトルでは存在しない。しかし、（3）の 21° 永続性の章中の La. 539-Br. 614 は次の如くである。——《国々は必要に応じてその法律をときどき曲げなければ滅びるであろう。だが、宗教はそれを許さなかったし、また行なわなかった。したがって、そういう妥協か、奇跡かが必要である。／曲げることによってみずからを保った例は珍しくないが、それはほんとうにみずからを保持することではない。それでもなおついに全く滅びるのだ。千年もつづいた国は一つもない。なのに、この宗教はいつもみずから

を保持し、しかも変動しなかった。これはその神聖を示すものだ。》この断章は、キリスト教の永続性が《神聖を示す》ものたる《奇跡》miracles に因ることを、明らかに示している。それゆえ、(1)の奇跡=(3)の21°永続性を結論しうるのである。したがって、残る(1)の証拠は、(3)の22°モーセの証拠と23°イエス・キリストの証拠との全体またはこの一部と推定しうる。

ところで、前記の Périer の最後の証拠にかくする叙述中には、モーセの証拠のことは出ていない。しかも Périer は、前出の引用文の書かれている個処より前の個処で、モーセの証拠について叙しているのである——「かれ〔パスカル〕は特にモーセの書に目をとめた。……そして、モーセが嘘いつわりを書き残したということもありえないことだし、たとえモーセがいかさまな人物で、嘘いつわりをその民に伝えたとしても、民がいつまでもだまされたままではいるはずがないということ、多くの疑うことのできない事物をあげて、明らかにしたのであった。／また、かれは、この書物〔モーセの書〕のうちに伝えられているさまざまな不思議な奇蹟についても語った。」⁽⁹⁾ かように22°《モーセの証拠》に相当するものは、Périer の叙述にあっては、イエス・キリストの証拠にかんするものとは、明瞭に区別されているのである。それゆえ、前述の(1)の証拠=(3)の22°・23°のうちから、《22°モーセの証拠》を省かねばならないのである。したがって、われわれは、(1)の《証拠》なるものはまさに(3)の23°《イエス・キリストの証拠》にほかならないことを、結論しうるのである。

(d)——(a), (b) により、Périer の叙述中の「最後に」置かれたイエス・キリストと弟子(使徒)たちにかんする証拠=狭義の証拠; 表の(2)の12°《世界の動きによって》=狭義の証拠のはずであった。それゆえ(c)により、Périer によるイエス・キリストと弟子たちにかんする叙述=12°《世界の動きによって》=狭義の証拠(表の(1)の《証拠》)=(3)の23°《イエス・キリストの証拠》でなければならない。果してわれわれの推論は正しいであろうか。われわれは直接23°《イエス・キリストの証拠》の章を検討することにしよう。(i) まず第一に、Périer の叙する最後の証拠たるイエス・キリストと弟子たちにかんする記述との対比で言えば、同章中の大部分はイエス・キリスト自身

にかんするものであるが、更に fr. La. 599-Br. 802 には弟子たちの記述が見られる——《使徒たちは、欺かれたか、欺いたか、どちらかであるというのは、支持しがたい。なぜなら、ある人が復活したなどと思うのは、不可能なことであるから。／イエス・キリストは使徒たちとともにおられたあいだは、彼らをささえることができた。だが、その後、もし彼が彼らに現われなかったとしたら、だれが彼らを動かしたであろうか。》

(ii) 次に表の(2)の12°《世界の動きによって》もまた、23°《イエス・キリストの証拠》の章中に見出される——イエス・キリストの証拠としてのユダヤ民族の惨めさと永続性にかんしては同章中の La. 588-Br. 640 が、ネブカドネザルとユダヤ民族の関係にかんする神の摂理、預言については La. 591-Br. 639 が、またヨハネや預言者たちとイエス・キリストにかんする摂理については La. 596-Br. 693 が、存する。これらは神の摂理に従う《世界の動き》la conduite du monde を叙するものであるが、次の La. 594-Br. 701 は特にこのことを示すものである——《……ダリウスとクロス、アレクサンドロス、ローマ人、ポンペイウスとヘロデが、福音の栄光のために、そうとは気づかずに働いているのを、信仰の目をもって見るのは、なんとすばらしいことか。》

(iii) 以上すべてにより、われわれは遂にわれわれの推論の確かさを実証しえたのであり、かくして Classé の 23°《イエス・キリストの証拠》は《宗教の証拠》中の最重要のものであり、全証拠中の最後に置かれたことが、推論確定されたのである。

(八) 《アポロジ》のプランにかんしては、既述のごとく P. Ernst が、ポール・ロワイヤル版の二個の序文——Filleau の《Discours》と Périer の《Préface》——と、A.P.R. のタイトルを有する La. 309-Br. 430⁽¹⁰⁾との三者の内容的一致を証明し得ている。A.P.R. はパスカル自身の手になるものであるから、内容上最も信頼に足るものである。しかし、A.P.R. 中には《宗教の証拠》にかんする順序ないし列挙は欠如しているので、われわれは Périer の〈Préface〉および Filleau の〈Discours〉に準拠することにする。Ernst の著書よりわれわれにとって必要な部分のみを引用すれば、次の如くである⁽¹¹⁾。

Préface	Discours
d'Etienne Périer	de Filleau de la Chaise
.....
§§ 11/12. Moïse et les miracles. qui authentifient ses dires.	§§ 34/35. Moïse et les miracles qui authentifient ses dires.
§ 13. Loi figurative.	§§ 36 à39. La Loi.
§ 14. Prophéties.	§§ 40 à42. Les Prophéties.
§ 15. Transition entre les preuves tirées de l'Ancien Testament et celles du Nouveau.	
§ 16. Jésus-Christ.	§§ 46 à53. Jésus-Christ.
§ 17. Les Apôtres.	§§ 54/54. Les Apôtres.
§ 18. Etablissement de la religion chrétienne.	§ 56. «Les voies par où cette re- ligion s'est établie»

われわれは、Filleau と Périer の両者の記述内容が殆んど一致していることに気付くのである。この二個の資材が独立の源泉にもとづくものであるか否かは問題の存するところであるが⁽¹²⁾、いずれにせよ爾余の部分に関して A. P. R. との一致が否定しえない以上、これらの内容も正確と見て差支えあるまい⁽¹³⁾。扱て Périer の § 18 および Filleau の § 56 は、パスカル自身が提出した独立の《証拠》ではなく、序文の執筆者たち自身による要約であるから、証拠の内容をなすものは、例えば Périer の叙述中のものを挙げれば、§§ 11/12~§ 17 のものである。これらに対応するリヤスのタイトル（表の（3）の Classé）は、次の如くである——§§ 11/12=22° 《モーセの証拠》、§ 13=19° 《表徴としての律法》、§ 14=24° 《予言》、§§ 16/13=26° 《イエス・キリストの証拠》。したがってわれわれは、これらのリヤスのタイトルの順序が、パスカルの死直前のプランにおける順序であったと、言いうるのである。

（九）以上（五）～（八）の結論を総合し、かつ《宗教の証拠》を構成する《章》（リヤスのタイトル）の順序を矢印で表示すれば、次の如くである（各

《章》の間には単数または複数の他の章が入りうるという約束で、矢印を用いる) ——26° 《キリスト教の道徳》→22° 《モーセの証拠》→19° 《表徴としての律法》→24° 《預言》→23° 《イエス・キリストの証拠》。かようにわれわれは章名の順序の一部を、決定しえたのである。この順序決定の《章》の数は僅かとは言え、『第一写本』中のタイトル表のタイトルの順序と異なる点で、われわれの前回 (VI) の推論 (タイトルの順序がパスカルに由来するものではないということ) を裏付けるのみならず、次回以後に行われる各章の順序決定に際し、今回の (一) ~ (四) の成果とともに、重要な手掛りを、われわれに与えるであろう。われわれは、いまやこの事を期待しうる段階に達したのである。

(註)

- (1) 断章番号は Ed. Delmas を用い、訳文は「世界の名著24」(中央公論社)による (以下毎回同様)。
- (2) 例証の存在理由について述べておく——I, IIにおいて述べられた結論を実証により一層充実強化するために、われわれは「個別証明」の項を設けたのである。即ち今回は、リヤスのタイトルのみならず、リヤスの内容そのものが、プランに予定されていたことを、証明せんとするものである。
- (3) 或る章 (Aと呼ぶ) にぞくする断章 (Classé) と関連するこの Non classé の断章が、実際は別の章 (Bと呼ぶ) にぞくするはずのものであったとしても、なんら差支えはない。この場合には、A章とB章とが、ともに Non classé の書かれた時期のプラン中に生かされていたことになるだけである。
- (4) Pascal, OEuvres complètes (Ed. du Seuil), De l'esprit géométrique et de l'art persuader, p. 356. なお拙論「パスカルの説得術と思考法について」(駒沢大学外国語部研究紀要第一号), p. 1-2 参照。
- (5) Pascal, *ibid.*
- (6) 前掲紀要, p. 3 参照。
- (7) この断章は拙訳による。
- (8) Pascal, *ibid.*, p. 496-497 (訳文は田辺保訳による)。なお訳文中の「弟子たち」の原語は des apôtres である。扱てこの場合 Etienne Périer の解説した『パンセ』のプランのダイジェストが、果してパスカルの死直前のプランを反映しているか否かが問題となりうるであろう。だが拙論 (II回のIII) において紹介した如く、Ernst は Filleau の <Discours> と Périer の <Préface> およびリヤス (Classé) 中の A.P.R. のタイトルを持った断章 (La. 309-Br.430)

の三者の内容上的一致を既に証明しえているのである (Chavalier も <Discours> と <<A.P.R.>>との内容的一致を説いている——拙論Ⅱ回参照)。この断章は、抹消されていない事実から言って、パスカルの死直前のプラン中に予定されていたと言いうるものであり、したがってこれと内容的に一致する二つの序文 (Filleau と Périer のもの) 中の解説内容も、同然であると言いうるのである。即ち Périer の解説する <<アポロジー>> の叙述内容は、未分類断章群 (Non classé) にも通用するのである。

(9) Pascal, *ibid.*, p. 496.

(10) これはそれ自身で一個の<<章>>chapitre を構成している。Lafuma のリヤスに付与した番号の上から言えば、11° である。

(11) Pol Ernst, *la trajectoire pascalienne de l' Apologie*, Paris, 1967, p. 39.

(12) Lafuma は、Périerの<<Préface>>は Filleau の<<Discours>>に依拠したと、している (*Ecrits sur Pascal*, Paris, Ed. du Luxembourg, 1959, p. 105-106)。

(13) Voir Ernst, *ibid.*, p. 45. (註了)